

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	柘 植 欽 也
2. 審査委員	主 査：（岡山大学教授） 渡邊 満 副主査：（上越教育大学教授） 林 泰成 委 員：（兵庫教育大学教授） 渡邊隆信 委 員：（兵庫教育大学教授） 谷田増幸 委 員：（岡山大学教授） 高橋敏之
3. 論文題目 「対話」に基づく道德教育のあり方に関する研究 －マルティン・ブーバーの教育思想に依拠して－	
4. 審査結果の要旨 論文提出による学位申請者 柘植欽也 から申請のあった学位論文について兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：平成26年2月17日(月) 15:30~16:30 場所：兵庫教育大学 教育・社会・言語棟5階 506号室 1. 学位論文の構成と概要 序 章 本研究の意義と課題 ここでは、まず、「対話」なき学校教育と論者が捉える学校教育の現状と、それに対応すべき道德教育の歴史的経過およびその改善への取組を振り返るとともに、本質的な課題としての「対話」を提起する。次に、その「対話」の教育的意義を追求する本研究の課題、方法、内容構成について論述した後、これに関する先行研究の成果と課題を検討している。 第1章 道德教育における「対話」 ここでは、生徒たちが日常生活において直面している課題を議論のテーマとするとともに、ブーバーの主張する「対話」的プロセスを踏むことにより、自他の「現状存在」に目覚め、一人ひとりがかけがえのない人格として「証される」よう働きかけることが重要であるとの認識を示し、授業の中で実践すべき 道德教育の基本的なあり方としての「対話」の提案を行っている。 第2章 ” 全人格的関わり” としての道德教育 ここでは、ブーバーの教育論と教師論における道德教育論に関して検討を加え	

わが国の学習指導要領に掲げられている道德教育の理念がブーバー思想とその基本部分を共有しており、その理念を生かす上で彼の思想の実践化が求められることを明らかにしている。

第3章 ブーバー教育思想における「間の領域」と道德教育

ここでは、ブーバーの人間観、とりわけ「間柄」に関する思想の現代的意義について考察するとともに、学校における生徒相互の関わり現状から、その改革の手だてとしての「協同学習」の持つ価値と、道德教育として活用する際の限界を考察するとともに、他者とは「間の領域」における関係性の深さや程度に応じてつながっており、善悪ともに、お互いに影響し合っていることへの認識を促す工夫が求められる、との見解を示している。

第4章 ブーバーの対話的人間観と教育思想の特性

ここでは、ブーバーの「対話」思想がいかなる時代的背景を有し、いかにして生じてきたのかを検討するとともに、彼の「対話的人間観」の特性に関して考察している。その中で、ブーバーが独自の理念を生み出す契機となった、現代の危機的状況を克服するためには、人間同士が「パートナー的」となることが唯一の手段であるとしている一方、現代社会にはそれを阻む様々な要素が存在しており、その解決の方途として「真の対話」という概念を提起していることを取り上げ、今後の道德教育においては、こうした彼の思想が生かされ、教育活動へ結びつけられるべきであるとの見解に至っている。

第5章 ブーバー教育思想に基づく道德授業の理論と実践

ここでは、わが国の学校における道德教育、とりわけ「道德の時間」の授業の代表的な授業論を取り上げ、それらの特徴について検討を行っている。その際、学習指導要領や道德教育への多様な批判や道德授業の改善のための種々の工夫は行われているが、十分な成果が得られていないのは、教育の課題がブーバーの「人間の間柄」の課題に照準を置いていないことにあると論者は指摘する。それに対して論者は、ブーバーの“Charakter-erziehung”における道德教育思想を検討することによって“*Ich und Du*”(我と汝)という豊かな関係性を築き上げる教育を提案する。

2. 審査経過

本論文は、道德教育における「対話」について、マルティン・ブーバー(Martin Buber, 1878-1965)の人間観と教育思想に焦点付けながら考察してその現代的意義を探究するとともに、これまでのわが国の道德教育論や実践が抱える課題、特に個人に向けられた教育活動か集団に向けられた教育活動かのいずれかにとどまり、人間としての深い相互理解を基盤に置く生徒間の関係性を育成することができていない状況を批判的に検討することによって、教育実践者の立場から道德教育のあり方を論考したものである。その中で、ブーバーの求める「対話」の営みを通じて、生徒同士が互いの普遍的かつ固有の人格的価値に目覚め合うように促すことが、今日の道德教育における本質的、かつ喫緊の課題であることを明らかにしようとしている。

審査では、今日の道德教育が教室の全構成員に向けて行われてきたことを認めながら、そ

のためにかえって個々人の道徳的理解の深さに課題が生じる可能性があり、それに対して論者の提案する教師と生徒、生徒と生徒の二者間における「対話」はそれを補う意義を有しているとの評価がなされ、その点は本論文の独創性であり、現在「道徳の時間」の教科化が準備されているが、論者の指摘は教科「道徳」において道徳的価値の自覚を深める実践的な取組に理論的拠り所を与えることとなり、その学校教育への貢献は大きいことが認められた。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 柘植欽也 の提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位にふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。